

日本狼のゆくえ

いまやまぼろしの動物

原野農芸博物館図録・第5集



1970

原野農芸博物館

刊行のことば

原野農芸博物館長 原野喜一郎

自然を愛する関西文化人の集まり『生きもの趣味の会』の人たち40余人が、成年にちなみ、当原野農芸博物館で「狼のゆくえ」と題する座談会を開かれました。

サボテン類の収集、展示をはじめ、わが国農耕のはじまりから近代までの、農業発展を示す農具、ならびに民族資料を集収し、公開しております当館においてこのような座談会はまことに有意義なことと考えまして、進んで会場を提供した次第ですが、甲南女子大学教授上野益三博士、奈良女子大学教授津田松苗博士より、「日本狼は現存しているかどうかは全く謎とされていること、明治38年奈良県大台ヶ原山中で捕獲されたのを最後として姿を消し、いまや歴史上の動物となっていること」が詳しく説明され、深い感動を覚えました。その内容は貴重な資料であり、後世に遺さねばならないものと考えました。さいわい、当館で座談会の一ぶしゅうを録音していましたので、これを広く、また将来に伝えるため両先生のご了解を得、当原野農芸博物館図録第5集にまとめ、関係方面のお役にたてることに致しました。

なお、編集にあたり上野、津田両先生から数度の推敲ならびに写真の提供にあずかり、また芦屋大学教授筒井嘉隆先生から序文をいただきましたこと、刊行にあたり厚く御礼を申し上げます。

昭和45年盛夏

序にかえて

筒井嘉隆

世の中に、植物や園芸に興味をもっている人は数多く、また動物やその飼育が好きでたまらぬという人達もたくさんいる。おたがいに分野はちがっていても、生きもの好きであることは共通している。ところが「山草会」とか、「バラ会」、「野鳥の会」、「昆虫同好会」など、範囲の狭い専門的な集りはあるが、共通した話題があり、たがいに見聞を広めて益しあうことも多いであろう「生きもの趣味の集り」はもたれていなかった。

こうした集りを何とかしてもちたいと思い、同好の士が集って、年に数回、座談会や見学会、自然映画の鑑賞会などの催しをするようになってから、もう20数年になる。

そしてこの度、原野農芸博物館会議室において、成年にちなみ「オオカミ座談会」を催した。上野益三博士が、明治末年に日本の山野から姿を消したヤマイヌの、今は世界にも僅かしか残っていない頭骨を持参して、その最後の標本の収集と、その経緯についてくわしく話され、津田松苗博士からはアメリカオオカミのコヨーテについて、その頭骨を示されながら興味深いお話をうかがった。出席者も例になく多く盛会で、有意義な集りであった。

そしてその録音が、原野農芸博物館の報告として出版されることになったのは、「生きもの趣味の会」として望外のよろこびである。

上野、津田両氏にお礼を申しあげるとともに、原野館長の御好意と御尽力に對し深く感謝の意を表する次第である。

日本狼のゆくえ

昭和45年2月14日、原野農芸博物館に於て、
“生きもの趣味の会座談会”筆記

上野 私は犬や狼の研究をしている者ではありませんが、日本の古代から今までの動物や植物の変遷を調べているうちに、犬や狼が出てくるので興味をもつようになったのです。そこでそういうことからお話ししましょう。

日本の犬や狼について最初に動物学的な記事を書いたのは、シーボルト博士でしょう。シーボルトは日本からヨーロッパにかえってから『日本動物誌』を著わしました。ここに持って参りましたのがその本です。日本人で狼について書いたものは、東北の酒田市の光丘文庫や、熊本大学に保管されている旧藩主細川重賢侯の文書の中にありますが、学術的なものといえば、この『日本動物誌』が最初といえましょう。

この本に狼の全形図(次頁の写真)、さらに頭骨を横と内側から見た図があります。この絵が狼のほんとうの姿を写しているのか、どうかには多少疑問があります。

日本狼の実物は、東京上野の国立科学博物館に剥製が1頭と、骨格が1体あります。これを広島



上野 益三 教授

高師教授の阿部余四男という先生が写真に撮られたのが、この図版ですが、これとシーボルト博士の図とをくらべると、どうもシーボルトの方がスラリとし過ぎているような気がします。

また、明治13年、東京大学(註1)のお雇い教師になったダビッド・ブラウンスという人が書いた狼の記事が、横浜で刊行されたクリサンセマムという雑誌に載っています。この人はドイツの地質学者ですが、動物にもたいへん興味をもち、化石も多く集めて研究しました。この雑誌は3~4巻で廃刊され、いま日本じゅう探してもなかなか見つからない、珍しいものです。たまたま、その揃ったセットが東京女子大学にありましたので、

(註1) 東京帝国大学は明治30年、それまでは東京大学→帝國大学

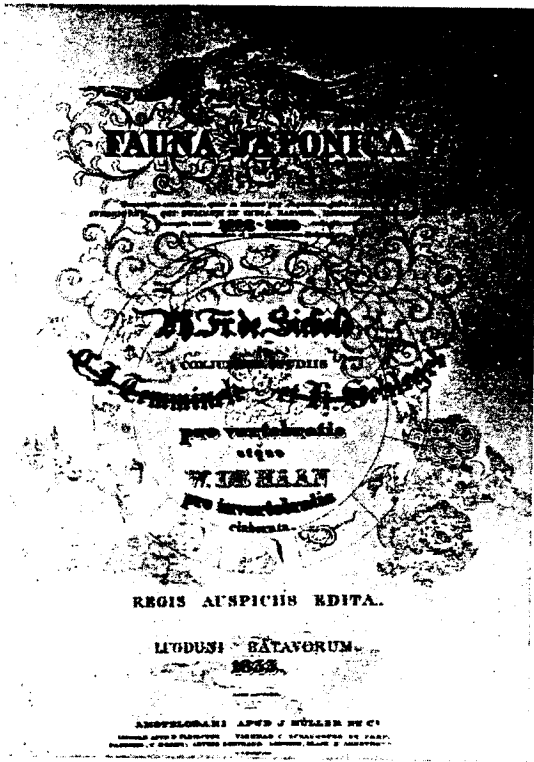


“生きもの趣味の会”座談会(2月14日原野農芸博物館で)

ブラウンスの1881年の論文を写真に撮らせてもらいました。もっともブラウンスの狼の絵は、ミバートという人が書いた犬科のモノグラフに転載してあります。この図が日本の狼の生きた姿を最も忠実にうつしているように思われます。ブラウンスも、ほんとの姿が非常によく描けていると、自分が依頼した画家をほめていますので、これが日本狼の真実に近い姿だと思えます。(表紙の絵)

狼はもう日本にいないか

では、シーボルトはどこで狼を手に入れたのか、といいますが、1826年、つまり文政9年に長崎から江戸へ、将軍にあいさつに行くオランダ商館長の随行旅行の途中、大阪の天王寺にあった動物店で、狼を見た、日記に書いています。その年の6月、江戸から長崎へ帰る途中、再びその動物店を訪れています。いま考えると、高津神社の石段の下に江戸時代から有名な黒焼屋があり、黒焼ばかりでなく、生きた動物も売っていたことが『撰津名所図会』のような古い本の記事から想像されます。シーボルトはここで買ったのでしょうか。シーボルトの旅行日記は斎藤信という方の翻訳で『江戸参府紀行』の題で、『東洋文庫』とい



シーボルトの“日本動物誌”の扉

シーボルト記念像 (西独・ウエルツブルグ市)
(川合禎次博士の好意による)



う双書の1冊として出版されています。それによると、

「1匹のオオカミと野生のイヌ(ヤマイヌ)を買ったことがある。」

とあります。斎藤訳の前に呉秀三という先生が同じ紀行文を『異国叢書』の1冊として出していますが、それにも同じことが書かれており、それには

「狼(オカメ)1匹と豺(ヤマイヌ)1匹とを買い入れた。」

となっています。

その後、明治7年10月に、三重県尾鷲港に入港した英国の小形測量艦の、セント・ジョン艦長が大台ヶ原の山容を望見して大いに興味をかき立てられたのか、10月15日から10日の予定で登山しました。その紀行文に

「昼間でも狼が間近かにきて吠えた。」

とあります。その少しあと明治11年に、ロンドンの動物園、“ズーオロジカル・ガーデン”に生きた日本狼が1匹寄贈されました。はるか極東の日本から珍しい狼が送られてきた、と毎日多くの市民が見物に来たとのことでした。



日本動物誌に載っている日本狼の図

以上が日本狼に関して書かれた古い資料ですが、あとは明治38年に大和の鷲家口で1頭の狼がとれた事実だけです。それが日本で狼が獲れた最後の記録なのです。しかしながら日本には今でも狼がいる、いや、もういない、という議論が絶えません。私も、狼はすでに全くなくなった、と断言できる資料をもっているわけではありません。しかし、誰かが捕獲するなり、屍骸を持参するなり、確実な事実がない限り、いるとは断言できないのです。明治38年以後には誰1人、狼を見ていないのですから、もういないのではないかとということが考えられるわけです。

遠野物語の狼

柳田国男先生の「遠野物語」という有名な本につきの文があります。遠野は岩手県釜石市の西の方の地名で、そこでの聞き書きを集録したのが、この物語ですが、その中に今から約130年前「和野の佐々木嘉兵衛という人が界木峠^{まかいと}へ狩猟に行ったとき、向うの峯より何百とも知れない狼がこなたへ向って走ってくるのを見て、恐ろしさのあまり、木の梢に登っていたところ、その下をいくつとも知れぬ足音がして、北の方へ走り去った。それ以後、遠野の狼は甚だ少なくなった。」とあります。この「遠野物語」にあるように、またセント・ジョン艦長が大台ヶ原山中で、昼間でも狼に会ったことからみると、明治のはじめころにはまだ、狼がかなり各地にいたことが想像されます。



シーボルトの「日本動物誌」を説明する上野教授

しかし、日本では狼とは恐ろしい獣で、山野を彷徨しているという観念が昔から強いあまり、狼がみち溢れていたように考えられた嫌いがありません。何れにしても、明治11年にはロンドンの動物園に生きた日本狼が寄贈されていますし、大台ヶ原山中でも実際に見ているのですから、当時かなりの数の狼が生存していたことは事実でしょうが、明治30年ころには非常に少なくなっていたのも、また事実といえましょう。明治38年、アメリカ人のマルコム、アンダーソンが鷲家口で1頭の狼を入手したとき、猟師たちは「非常に少なくなって、珍しい動物だから、うんと高く売りつけてやろう。」と10円50銭と吹きかけ、結局8円50銭で売買したことから考え合わせると、そのころはもう散発的に見られる程度になっていたのでしょうか。かりにその後生存していたとしても、1匹では種族は存続しません。牝牡がそろって生きていてはじめて存続できるわけですから、1匹狼ではどうにもならず、次第に減少し、ついには絶滅したのではなからうかと思うのです。

ついでに、犬について少しお話ししたいのですがそのまえに北アメリカのプレイリー・ウォルフ、つまり草原の狼ですが、そのプレイリー・ウォルフについて、津田さんからお話ししていただきますよう。

日本狼より小さいコヨーテ

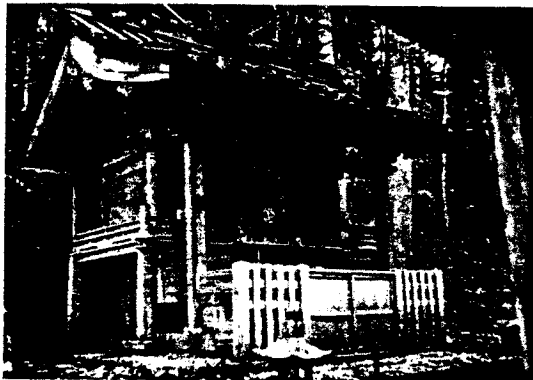
津田 私は狼のことはもちろん、哺乳類にあまり関心がないので、ここで話できるガラではありませんが、上野先生からいろいろ誘われ、きょう、この標本を持って伺ったわけです。

さて、上野先生の狼の話の続きを申し上げますと、奈良県は南に辺境を擁しており、いろいろと珍しい動物がいます。奈良県ではいま、市、町、村誌の編纂がさかんで、ここ十数年の間にほとんどの町村が発行しました。そのうちに十津川村の村誌があります。これをつくるとき、わたくしは狼のことを書か



津田 松 苗 教授

ねばならないと考えて一おう調べました。十津川村というのは、ご承知でもありましようが、奈良県の最南端にありまして、北に天辻山系、東に大峯山系、南に果無山系、西に護摩壇山系が^{はてなし}あって、自然の境をなしています。これらの山脈の支脈が村内にのび、1,000メートル以上の高峯が40以上もあるという村です。大きさは村としては本州で一ばん大きい村です。そういう山深いところですから、狼もたくさんいたでしょうし、いろいろの言い伝えもたくさん残っています。例えば、大宮神社という社では狼が神のお使いである。遷宮（建て替え）のときに大工がたいてい、その姿を見るというのです。その狼は「足袋はき狼」で足先が白い。いまから20年ほど前にもみた、というのです。このような狼が、お使いになっている神社は熊野川の東の支流、北山筋にもあります。さらに狼について古老たちにアンケートしたり、個人面接で聞いたり、また狼の牙でつくったという印籠の根付けをみせてもらったり、これらを総合しますと、遠吠えを聞いた、足あとをみた、毛が混っている糞を見た、夜または夕やみのなかで姿を見た、という程度です。これらは何れも狼が現存するという証拠にはなりません。「白昼姿をみた」という話さえもないのです。それに、たとえ、誰かが白昼この眼で狼をみた、といい張ったとしても、なお見誤りということがありますから信用できません。殊に明治30何年かまでに狼をよ



大 宮 社 社 (十津川村神納川区)

くみて、狼を知っていた人はもう、現在ではほとんどいないでしょう。見たこともない人がはじめて、しかも極めて瞬間的に、何かそれらしいものを見たとき、それを狼と断定することが果たして可能でしょうか。夕暮れとか、夜とかに見たとあればなおさらのことです。

狼の確認は狼を捕えない限りできません。あるいは屍体を見つけたというのでも、もちろん結構です。

実はわたくし自身の気持としても、狼が絶滅していることを望みはしません。少しでもよい。たとえ1頭でもよい。残っていることを希望しています。害獣であっても、いまとなっては貴重な動物です。奈良県の山奥のどこかに残ってはいないか、そういうのはかない希望を抱いていますが、現実の問題としては、存在の証拠は一つとしてないと、いわざるを得ないのです。

斐田猪之介氏が書いておられるような「実際には生きている」という記事は、読めば興味深いのですが、生存しているという、はっきりした事実はないのです。それはともかく、明治38年に最後の狼が奈良県で獲れたということは、奈良県での狼の研究が、まことにやりがいのある仕事でありまして、民族学的にも、生物学のうえでも意義が深いと思う次第です。

大阪市大の鈴木さんという人が、大阪市立自然科学博物館から出ているネーチャー・スタディに『狼と山犬』と題して書いておられるなかに、

「高島春雄博士に、大台ヶ原山中で狼の研究をしたいが……と相談したところ、民俗学的にやるのならともかく、動物学的研究は無理だ、と教えられたのが強い印象となって、いまだに忘れられない。」

とあります。つまり狼は歴史上の動物で、現存していない。ただし、民族学的に調べるなら、調べる価値がある、という意味で、わたくしはこの高島さんのご意見に同感です。

さて、話を戻しまして、上野先生からお話のありましたコヨーテに移りましょう。

これがコヨーテの頭骨です。アメリカのユタ州といえば不毛の沙漠地帯が多いところです。ここへモルモン教徒が移住し、水を引いて沃野を形成しました。そのモルモン宗立の大学がブローボ市にあります。ブリガム・ヤング大学といいますが、そのホワイト教授に招かれ、数日間滞在し



ミュンヘン動物園の
ヨーロッパ狼
(津田教授撮影)

ました。そのとき、この頭骨をもらいました。この種類は北アメリカを中心としてメキシコから中米にまで分布します。食物はカモシカを主とし、カモシカを襲い、果実、昆虫も食べるといいます。

ここにある日本狼とくらべると小さく、キャシャに見えます。それからヨーロッパ狼ですが、これもヨーロッパの山岳の多い地方にはいまなお棲息しています。ミュンヘンの動物園にも10匹ばかり飼っていました。セバードくらいのかなり大きいものでした。その写真をお目にかけてしたいと思います。(上の写真参照)

知られない“狼の最後の地”

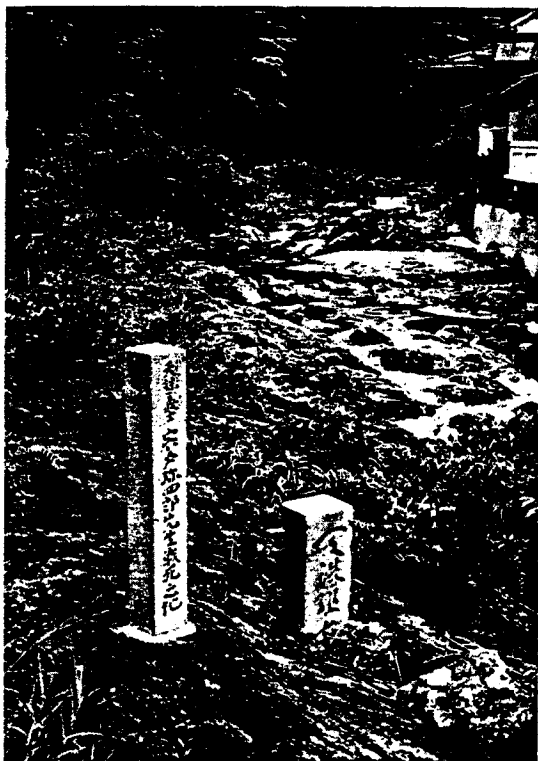
先刻、上野先生のお話にありました最後の日本狼の捕獲地、大和の驚家口のことですが、これは吉野川の本流と高見川の合流点(国樞)からさらに高見川を遡った東吉野村にあります。私たちはここを根拠地として、吉野川水系の生物についていろいろ調査しております。その驚家口に杉ヶ瀬という旅館があります。旅館の主人は土地の観光協会の副会長で、観光開発にたいへん熱心です。村の史蹟としては天誅組の勇士たちの戦死した場所や、お墓がありますが、その天誅組の話にはとても熱心で、私が

「天誅組のはかに、日本狼のことなどもPRしてはどうか。一つ“日本狼終焉の地”とでもいう

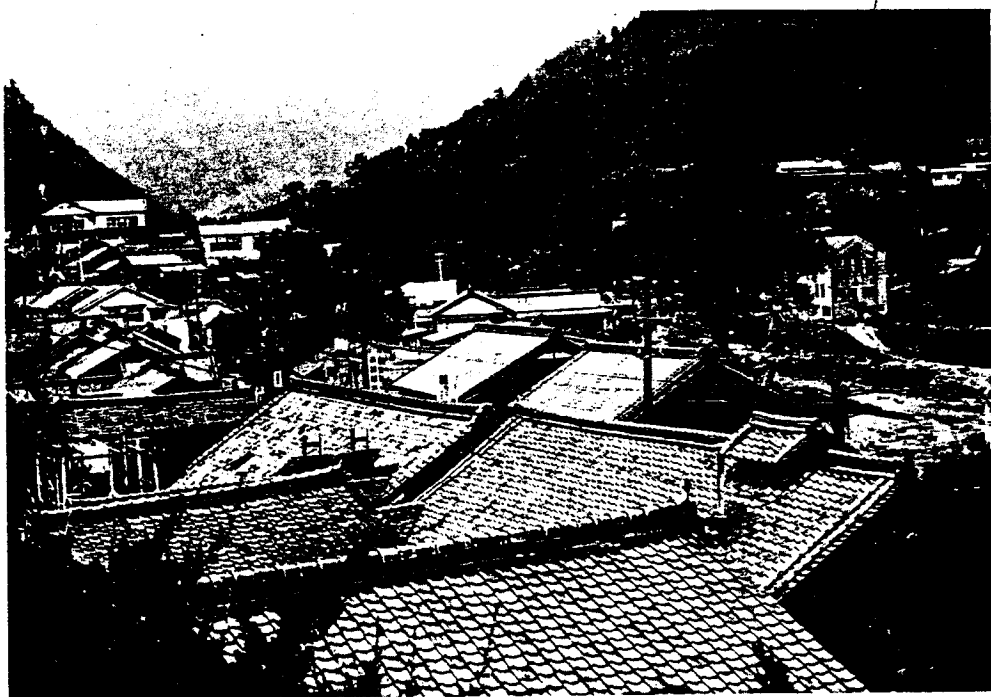
標柱をたてて、日本狼絶滅の由来でも説明したら土地を訪れる人に興味を湧くのではないか。」

と申しまして、この研究をされた上野先生のことと言及しましたら、あるじはすかさず、

「その先生ならよく知っています。ここへもお見えになりました。」



驚家川、芳月楼の前あたり、天誅組の碑がある



といました。ともかく天誅組はあまりにも人口に膾炙されているのに対し、狼のことはほとんど知られていないのです。ついでの話ですが、この奥に神武天皇が東征のみぎり、天皇が武運を占われた古蹟があります。丹生川上中社という神社の前の夢淵という淵ですが、ここに天皇がかめを沈め、

「これで魚が浮き上れば戦に勝つこと必定。然らざれば敗れる。」

と宣言されましたが、天皇のお言葉通り、たかさんのアユが浮き上った、という伝説のあるところ。いま考えると、かめの中に有毒物質が入っていたわけで、これが“毒流し”のはじまりかも知れません。

夢淵の下流数百メートルの地点に、天皇が魚の流れるのをご覧になった場所を示す“魚見石”という碑が立っています。このように驚家口およびその付近はわたくしどもにとってなかなか興味の多い場所でございます。夏の避暑などにはもってこいの気持ちのよい清潔なところ。す。 (上の写真参照)

日本で数少ない狼の頭骨

上野 それではもう少し、狼や犬の話をしましょう。狼の類には、さきの津田先生のお話のコーナー、欧州からアジアにいるオオカミ、東南ヨーロッパからインドまでひろがっているジャッカル、それからオーストラリアの野生犬ディンゴなどがあります。日本狼も特異な種—島嶼種として存在していたわけです。

そこで日本の犬の祖先は、ということ、これをはっきりさせることはたいへんむずかしい。日本狼が日本で家畜化されて犬になったかどうか、というむずかしい問題があるわけです。

東大教授の動物学者、故渡瀬庄三郎博士は

「日本の古代犬は大陸や南方から飼いならされたものが、民族とともに渡来した。」

と説き、これも故人の京大教授の病理学者、清野謙次博士は

「野生の犬族が分布し、それぞれの地方でいろいろな時期に飼いならされ、民族とともに移動した。」

と説明しています。ではどこから、どの民族とともに来たかということ、これまたなかなかむずかしい問題です。『日本古代家畜史』を著わした鑄方貞亮という先生は

「縄文時代の犬はわが国土内で家畜化されたもので、海外から渡来したものでない。」

というのです。いずれにしても日本の縄文時代に犬が飼われていたらしいことは、出土の古骨からわかりますが、これが狼とどのような関係にあるかということは、さきに申しましたように、そう軽々しく答が出ないのがほんとうかと思えます。早稲田大学の直良信夫教授がこれらを総合研究されました著述『日本産狼の研究』によりますと、日本の石器時代の遺蹟、弥生時代も少し含めて、170カ所から犬の骨が出ています。そのうち奈良県田原本の唐古遺蹟^{からこ}以外は大部分が貝塚です。それらの骨は狼のような野獣、それと家犬との雑種、さらに家犬と、いろいろまじっています。縄文時代というと紀元前3世紀ごろまでで、それから紀元後5世紀近くまでが弥生時代ですが、この弥生時代のはじめにはもう米が大陸から渡来していて、農耕文化に移るわけです。この時代の遺跡からは犬の骨はあまりに出て来ません。縄文時代は狩猟が主だったので犬を大いに活用したが、農耕時代になると犬があまり必要でなくなった。これが犬の骨の出土が少ない原因だという話です。

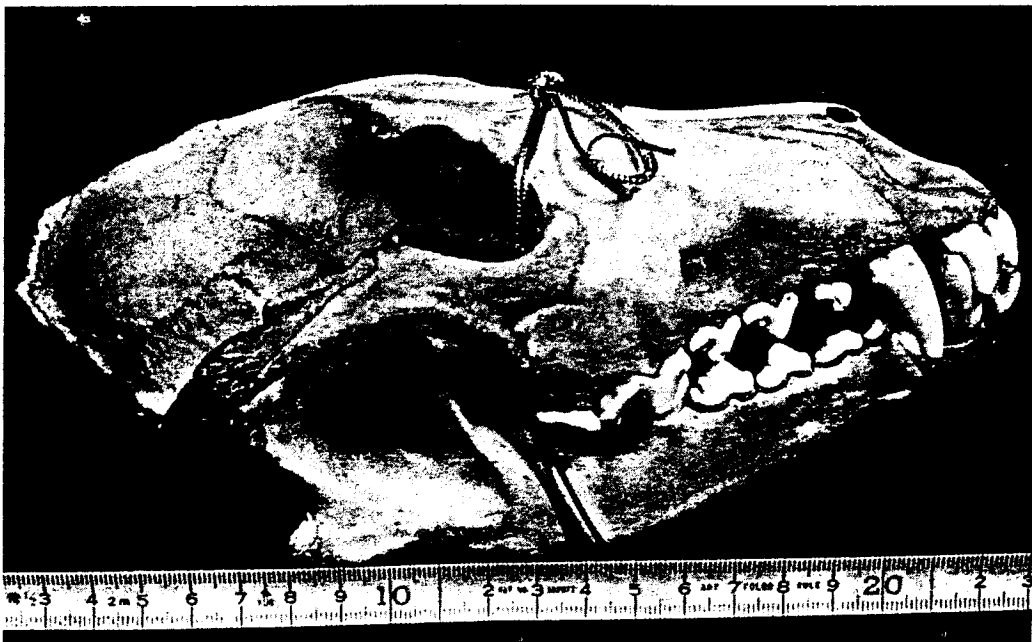
4世紀以後はいわゆる古墳時代となりますが、この時代には犬の形の埴輪が出て来ます。その出土数はわずかですが、日本人が太古から犬と親し

くしていたことを示しているようです。

さて、日本全土に狼はまだいるという見方があり、斐田さんのように大峯山脈の奥で足あとなどを探し、確かめようとしておられる熱心な方がありますので、そのうちに何かが見つかるかも知れません。しかし、現在のところ、狼がいるという具体的な事実がないので、全く“まぼろしの動物”というほかはなく、先ほどの津田先生のお話にあったように、民族学的な研究対象でしかないように思われます。

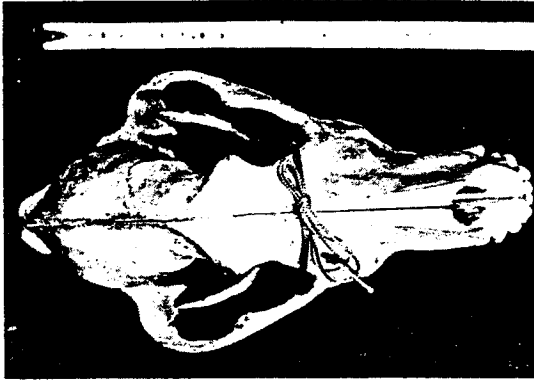
ここに持参しました頭骨は朝鮮の犬です。(次頁の写真参照)日本の犬と少し違うように見えますが、犬に変わりはありません。歯の数が犬科の特長である42本あります。

また、これが“まぼろしの日本狼”の頭骨です。学名はカニス・ホドヒラックスとなっています。頭骨の大きさは、だいたい長さ22センチあります。(下及び次頁の写真参照)驚家口でとれたのは若い狼とみえて少し小さく、18センチですから、それに比べるとかなり大きい方です。もう亡くなられた斎藤弘吉先生が大切に保存されていたのですが、ある関係から私の手許にいま保管しています。斎藤先生はこの頭骨を石膏で形をとって大英博物館に送り、驚家口の日本狼の頭とくらべてもらい、日本狼にまちがいないことを確かめられました。つまり大英博物館から「確かに日本狼

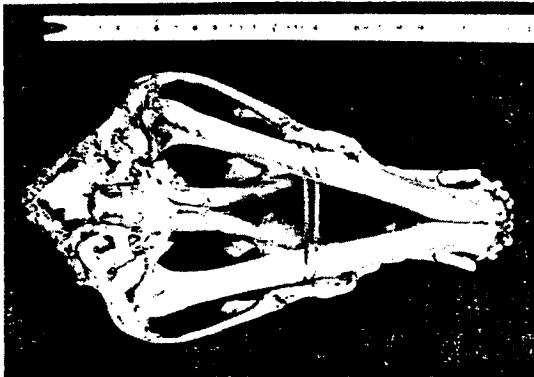


日本では数少ないカニス・ホドヒラックスの頭骨(長さ22cm)

である」というお墨つきをもらったわけです。そういういわれのある、日本では数少ない狼の頭骨の一つです。狼の遺体は日本全国で50個を出ないでしょう。ついでに申し上げますと、さきに申しました阿部先生は哺乳類の専門家で、渡英の折に大英博物館に保存されている「驚家口の狼」の頭骨について詳しく調べ、その結果を『日本と朝鮮の狼』という論文にかいておられます。



カニス・ホドヒラックスの頭骨を上から見る



カニス・ホドヒラックスの頭骨を下から見る



朝鮮の犬の頭骨

わからぬ犬と狼の親近度

これは飛弾高山の古道具店で入手した煙硝入れの腰さげ袋です。皮でできています。根付けにはこのように狼の下顎の前のはしを使い、赤と黒に漆塗りしてあります。門歯は抜けていますが、犬歯は完全で、狼に間違いありません。犬や狼の歯は上が片側3・1・4・2。下が片側3・1・4・3で合計42本。また、前肢は5指、後肢は4指あり、水かきがあるのを特長のようにいう人がありますが、これは特長にならないでしょう。こまかい話になりますが、犬の細胞の染色体について北大の牧野佐二郎教授は「倍数で78個ある」といい、雌雄を決定する性染色体はXY型であると説明されています。そこで生きた狼を捕え、染色体を調べるのが出来れば、犬と狼との関係がかなりはっきりするでしょうが、生きた狼を捕える望みが絶えた今日では、これを調べる希望もなくなったわけです。もしシベリア狼とか朝鮮のヌクテで調べることが出来れば、犬との親近の度合いがわかると思います。

それ以外のことは古生物学者や考古学者が出土遺骨について詳しく調べておられ、多くの資料があります。これを総合し、研究すれば過去の犬との関係とか、系統などがよくわかってくると思います。(持参の日本狼の頭骨について質疑あり。)

江戸時代でも少なかった狼

日本の狼は全国どこにも多くいたわけではないようで、いわば狼の名所というか、群棲地といわんまでも、かなり多くいたところがあったようです。例えば関東では秩父、中部では美濃と飛弾、それから大和の奥、さらに西にも少し多くいたところがあったと思われ、狼に関する伝説もそういう地方に多く生まれています。

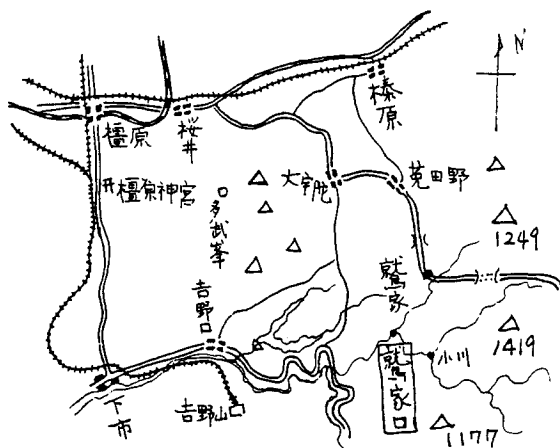
狼の護符を出す神社が秩父地方に多いことなどもそうです。社頭のコマイヌが狼の石像だったり、その他信仰的なものが多く見られるのも同地方です。また、狼の説話は無数にあり、「送り狼」の話や、近ごろは1匹狼という言葉が流行していますが、ほんとに1匹狼になっては子孫が絶えるほかはないのです。このことを最初に注目したのは柳田国男先生でしょう。先生の名著『遠野物

日本狼の最後の舞台、鷺家口

それではアメリカ人、マルコム・アンダーソンが大和の鷺家口で、日本最後の記録になった狼を得た話を少し詳しくいたしましょう。

アンダーソンは、鷺家口に來たとき26歳になろうという青年動物学者でした。大学を出て間もなく、イギリスのベッドフォード侯という大金持ちから

「東洋で哺乳動物を集めてほしい」と望まれ、同侯のいわゆる動物学探險のために來朝しました。東北地方を廻ったあと、1905年、つまり明治38年の1月、狩猟免状の交付を受けるため奈良に立ち寄り、ここで種々の動物を集めるにはどこがよいか、と相談しました。鷺家口あたりは獸が一ばんよく集まるところだ、と教えられ桜井經由で出かけました。桜井では皆花楼^{かいか}に泊っています。私もその宿を見に行きました。火災にあったため規模がアンダーソン当時の半分になっていましたが、古い部屋がまだ残っていました。彼はその翌日鷺家口に着いたのです。1月13日のことでした。ここは鷺家川の谷の口に沿った戸数200ばかり、町の端から端まで500メートルくらいの小さい町です。今は東吉野村小川となって、鷺家口というなつかしい呼名は、奈良交通のバス停留所名と警察官の駐在所名とに残るばかりです。アンダーソンはここで芳月楼という宿に入りました。宿の主人は前北丈太郎という人でしたが、いまは家も人手に渡り、建て変わっているし、当時のことを知った人もいません。ところが裏隣に住んでいた上谷万吉さんという老人があることを知りまし



話」にあるように、狼の大群が北へ移動したが、その後、遠野地方に狼が目に見えて少なくなった、という話などはなかなか、面白く読まれます。みな津軽海峡に突っ込んでしまったわけではないでしょうが、いまは全くないようです。柳田先生の狼のお話は、『孤猿隨筆』という本の中にまとめてありますし、『定本柳田国男集』中にも収められています。今日の話の題の「ゆくえ」も柳田先生の文から借用しました。

北海道にも明治のはじめまで、たくさん狼がいました。シベリア狼と同系で、内地の狼、つまり日本狼とは別種なのですが、これは自然に絶えたのではなく、人間が殺してしまったのです。狼による家畜の被害が余りに大きかったので、当事者が彼らを全滅させる方針を決め、毒薬で絶滅させました。全く見なくなったのは明治22年ごろのことです。いまなら2組か3組の狼のつがいはどこかで保護して、子孫を残させてでしょうが、絶滅させてしまっただけなら悔んでも追いつきません。札幌市の北大博物館に剝製があるだけで、まことに遺憾なことでもあります。北海道狼はここにある日本狼、カニス・ホドヒラックスよりも大形でした。自然保護はつねに、かなり先のことを考えて実行すべきで、1匹狼になってしまっただけでは処置なしです。

話は変わりますが、先ごろ必要があって、徳川三代将軍家光の実紀、つまり、主に將軍職の間の日記から、動物に関する記事を書き出しましたところ、家光が33歳の血気さかんなころには月に4〜5回も墨東、葛飾その他に狩猟に出かけています。そして夥しいツルや白鳥を獲っていますが、狼の記録は見当りません。同じように八代將軍吉宗の実紀を見ますと、江戸の東の小金ヶ原で1日にイノシシ11頭、シカ470頭を獲っていますが、そのうちに狼が1匹あります。これを見ると、いまの東京近郊にはかなりの野鳥や野獸がいたようですが、鹿が500頭近くも獲れているのに、狼はただの1匹しか獲れていません。狼は打ちとめにくかったのかも知れませんが、草食獣と肉食獣との習性のちがいはありましようが、そのころでも狼の密度はたいへん小さかったとも想像されまます。人間の心の中に根強く住みついていたほど、狼は山野にみちみちていたわけではないかとも思われるのです。

た。いま大阪の天下茶屋で家具装飾会社を営む社長だと聞きましたので、帰阪後訪れました。この上谷さんの思い出話では、

「芳月楼は自分の家から一段低いところにあったので、その2階がよく見えた。11歳のころだったと思う。芳月楼の2階に泊っていた西洋人が裏庭で獣の皮を剥いでいた。シカやイノシシのような大きな動物の皮を剥ぐので嫌われ、宿の主人から“かえってくれ”と何べんもいわれたと聞いたことを覚えている。」

このアンダーソンといっしょに鷲家口に来た日本人がいます。通訳兼助手の金井 清という人、それから鉄砲の名人といわれた石黒兵次郎という人、この人は千島へアザラシとりに行っていた人ですが、横浜でアンダーソンに見込まれ、猟人として同行したのです。アンダーソンは石黒をブラックストーンと呼んで親しまいました。

金井清という方は一高から東京帝大法科の政経学科を卒業し、長年鉄道省関係に勤めた後、戦後には諏訪市長を6年間つとめ、その後社団法人世界貿易センターの理事になられ、昭和41年に死去されました。アンダーソンが出した新聞広告を見て応募したのでした。



鷲家口の上流、鷲家に残る昔の伊勢街道道しるべ

さて、アンダーソンの鷲家口での記録によると、獲物は日本狼1、狸の牡1、テンの牡2、牝2、イタチの牡6、ムササビの牡3、牝1、モモンガ牡2、牝4、カモシカの牡と牝各1、リスの牡1、牝2、ノウサギの牡牝各2、イノシシの牝1、シカの牝1。これだけのものを2週間に獲ったのですから、相当の大猟だったわけです。もちろん、大きいものは土地の猟師からも買い込んでいます。鷲家口周辺がいかに獣の宝庫であったかがわかります。この記録を見て不思議に思うのはネズミのような小動物が少しもないということです。小動物もたくさん獲っていたのですが、このあと四国へ狩猟に渡るとき、神戸の旅館に預けました。その旅館がアンダーソンの留守中、隣の映画館からの出火で類焼し、預けた小動物は丸焼けになってしまったのです。惜しいことでした。

鹿を追いかけて撲殺さる

さて、日本狼に関する金井さんの記録によると、

1月23日、2人の猟師が1頭の狼をかついで売りに来た。きくと10円50銭だという。高すぎると一たんはねつけたが、アンダーソンは、日本で狼はもう、容易に手に入らないことを知っていたので、ぜひ買いたいという。金井さんは、いま買うことはない、とアンダーソンにしばしの辛抱を要求した。果たせるかな、猟師たちは再び狼を担いで現われた。結局、8円50銭で買ったが、腹部が少し青くなりかけて臭くなっていた。やむなく頭骨だけを保存したらしいのです。皮のことはよくわからない。金井さんは

「これが日本で最後の狼になろうとは思いませんでした」

と感慨深い述懐の記を33年後に書いておられます。先ほど話しましたように、この頭骨は大英博物館博物館学部に保存してあります。

私はこの狼がどうして獲れたか、もう少し詳しく知ることが出来ないものかと、鷲家口でいろいろ人にきいてまわるうち、亀屋という古美術店の先代が知っていたらしいことがわかりました。以下は私が亀屋の当主亀井恭藏さんからきいた先代の話です。どこまで真実か保証できませんが、面白いのでお話しします。



「高見川と鷲家川の合流点に、(6頁の写真参照)秋になると材木流しのためのセキが作られます。材木が一定量集まると、セキを開いてどっと材木を流します。これを上市で拾い上げて製材にまわすのです。この臨時の貯木ダムで筏師たちが材木を筏に組んでいると、1頭のシカが何かに追われて森から逃げて来ました。38年の1月は特別に寒くて薄氷が張っていたのを、シカはうろたえて氷の上に飛び出しました。氷が割れて足をとられ、もがいているところへ、それを追って狼が走り出て来て、これまた氷の割れ目に足をとられた。これをみるなり筏師たちは“この野郎ッ”とばかり得物を手にとりてなぐり殺した。狼の死体は役にも立つまいと、放っておいたのですが、あとで村に来ている西洋人が高く買ってくれるとき、それならかつぎ込んだ、というのです。だから日数がたち、腹部が青く、腐りかけていたのです。」

たいへん面白い、出来すぎたような話ですが、この話は鷲家口でよく語り伝えられているようです。その真相を一ばんよく知っていたのが現場に近い亀屋の先代だということです。

なお、アンダーソンが皮を剥いだ狼の頭骨につけた符箋の文字があり、短文ですが極めて重要な資料であります。それは「この狼は肉のまま手に

入れた。(皮だけ買ったのではないという意)それ以上のことは私は何も知らない。しかし、この動物は非常に稀であって、ほとんど絶滅しかかっていると、人はいう。日本名はオオカミまたはヤマイヌという。」と書いてあるのです。この符箋によって、当時、すなわち明治38年のころでも、狼は稀であったことがわかります。もっとも、その後でも日本狼はどこかにいるに違いないと自信をもっている人が何人かいることは、前に申しました通りです。そう思っているのがロマンチックでよいかも知れませんが、大和山岳会々長であった岸田日出男さんのように「これほどおびただしい狼が……」という言葉は果たして真実でしょうか。岸田さんの記事は明治33~34年ごろのことをいっているのです。アンダーソンが非常に稀だと符箋に書きとめたのは、すぐその数年後のことなのです。私にはアンダーソンが聞いて書きとめたように、明治38年ごろにはもう、ごく稀になっていたのではないかと思われるのです。今では動物学の領分をはなれて、さきに津田先生のお話にありましたように、もう民族学の領分に移ったというのが、実情ではないでしょうか。とりとめのない話に終わりましたが、みなさん方のご意見もお聞かせ願いたいと存じます。

from - coloured Illustrations of the Mammals of Japan
by Yoshinori Imaizumi Osaka 1960

測定：頭胴950~1230，尾270~400，足245~265，耳80~125，頭骨全長186~275，
上第四前臼歯20.5~29.0。

分布：アジア，ヨーロッパの大部分と北アメリカ。

142. ニホンオオカミ *Canis lupus hodophilax* TEMMINCK

1939. *Canis hodophilax* TEMMINCK, Tijdschr. Natuurl. Geschied, Physiol. 5 :
284, Hondo, Japan.

特徴：オオカミ中最小の亜種の1つで，特に四肢と耳介が短い。しかし，なお，四肢の長さは長脚のイヌと大差なく，日本在来種のイヌよりはるかに長い。即ち，前肢の肘までの高さは，肩の端より座骨の端までの長さの1/2位。体毛は長く，タン色をおびたベージュ色，頸・背・体側・尾の毛は先端が僅かに黒い。上下唇と頬は白色に近く，耳介後面は赤茶色，前胸下部前面に焦茶色の斑紋がある。頭骨は短小で吻は短く広い。

測定その他：頭胴950~1140mm，尾300，足245~250，耳80~81，頭骨全長186~208，上第四前臼歯20.5~22.7。

本亜種は1905年頃を境にして絶滅したようである。従って標本も極めて少く，複製標本は国立科学博物館所蔵の福島県産♂，東京大学農学部所蔵の岩手県産♀，和歌山大学所蔵の3点しか残っていない。しかし，頭骨はかなり多く保存されており，特に丹沢附近の部落から多く発見されている（梅沢英三氏等）。

分布：本州，四国，九州。

143. エゾオオカミ *Canis lupus hattai* KISHIDA

1931. *Canis lupus hattai* KISHIDA, Lansania, 3.25 : 73. (N. V.) City of Sapporo, Hokkaido, Japan.

1935. *Canis lupus rex* POCOCK, P. Z. S. 659. Yezo.

特徴：オオカミの中で最大の亜種の1つで，ニホンオオカミより著しく大きい。体色は変化が多いが，尾先は黒く胸前面に暗色斑がある。頭骨は吻が狭く長い。前臼歯はニホンオオカミより大。

測定その他：頭胴1200~1290，尾270~400，足250，耳105~115，頭骨全長269.5，上第四前臼歯28.5。

本亜種も北海道では1900年頃，絶滅したらしい。標本は北海道大学に♂♀2頭保存されるのみ。但し，サハリンと恐らく千島には尚生存しているという（HARPER, 1945）。

分布：北海道，サハリン，千島。